

- transmission, modulation, and plasticity. *Neuron* 13: 1031-1037.
- Masu, M., Iwakabe, H., Tagawa, Y., Miyoshi, T., Yamashita, M., Fukuda, Y., Sasaki, H., Hiroi, K., Nakamura, Y., Shigemoto, R., Takada, M., Nakamura, K., Nakao, K., Katsuki, M. & Nakanishi, S. (1995) Specific deficit of the ON response in visual transmission by targeted disruption of the mGluR 6 gene. *Cell* 80: 757-765.
- Nakanishi, S. (1995) Second-order neurons and receptor mechanisms in visual and olfactory information processing. *Trends Neurosci* 18: 359-364.
- Yokoi, M., Kobayashi, K., Manabe, T., Takahashi, T., Sakaguchi, I., Katsura, G., Shigemoto, R., Ohishi, H., Nomura, S., Nakamura, K., Nakao, K., Katsuki, M. & Nakanishi, S. (1996) Impairment of hippocampal mossy fiber LTD in mice lacking mGluR2. *Science* 273: 645-647.
- Kawabata, S., Tsutsumi, R., Kohara, A., Yamaguchi, T., Nakanishi, S. & Okada, M. (1996) Calcium oscillations controlled by phosphorylation of metabotropic glutamate receptors. *Nature* 383: 89-92.
- Nakanishi, S., Nakajima, Y., Nomura, A., Masu, M., Iwakabe, H., Hayashi, Y. & Yokoi, M. (1996) Functions and roles of glutamate receptors in synaptic transmission and plasticity. *Cold Spring Harbor Symposia on Quantitative Biology* 61, in press.

佐美光彦氏の『世界大恐慌——
一九二九年恐慌の過程と原因——』
に対する授賞審査要旨

本書は、佐美光彦氏が過去十数年研究をつづけ、十数編の論文として公表してきた成果を全面的に修正した上で集大成したもので、三編—二章から成る一、〇〇〇頁を越す大著である。その主題は標題に示されているように、一九二九年秋のニューヨーク株式市場の大崩落を発端として、三〇年代を通じてヨーロッパから日本までを巻き込んで猛威をふるった世界大恐慌の発生・波及・深化の過程を、アメリカを中心とし、ヨーロッパとくにイギリス、ドイツにも目を配りつつ分析・解明することにある。本書のほぼ四分の三を占める第二篇「世界大恐慌の発生・波及・深化過程」はそういう歴史的分析であり、まず第一次大戦の諸結果から叙述を起こして二〇年代に生じたアメリカ経済の発展・変化、および第一次世界大戦前のイギリス中心の世界経済の編成—ポンド体制がイギリスとアメリカという二つの基軸をもつ編成—ポンド・ドル体制に変化した過程が説明されている。ついで二九年のアメリカ恐慌の発生（一九二八—三一

年)、その深化(三二—三三年)の過程が詳細に分析された後、一九三七年再度の恐慌が起こり、三八年にいたってようやく鎮静を迎える経過を解明することで締めくくられている。

この歴史的的分析において佐美氏は、広くデータと統計数字とを精力的に蒐集し、それを駆使することを通じて実証的に景気動向を分析するとともに、従来の諸研究を批判的に撰取しつつそういう動向が生じた原因についての理論的説明を整理することに努力している。その分析は、氏の恐慌論との関連もあってやや金融面(国際金融をも含めて)の動向に偏っており、各産業とくにこの世界恐慌の中で極めて重要な役割を演じた農業や雇用・労働および国民消費などの分析が手薄になっている感はあるが、単にアメリカだけでなくイギリス、ドイツなどの資料も揃え、これまで十分に注目されてこなかった諸事実を明らかにし、極めて錯綜した歴史的過程に一貫した説明を与えた功績は十分に評価できる。

しかし、本書は単なる歴史的叙述にとどまるものではない。それは特に次の二点に重点を置いた新しい理論構成を目指していると思われることができる。すなわち、

(一) 従来の恐慌理論を広く検討し、批判した上で独自の恐慌論を構築し、それにもとづいて現実の分析をおこないつつその妥当性を検証すること。そのために、佐美氏は本書の第一篇「世界大恐慌

論の課題と方法」で従来の代表的な恐慌論を批判的に検討し、大恐慌を分析するための自己の理論的武器の整備をはかっている。それはほぼ、宇野弘蔵によって構成されたマルクス経済学の中でも極めてユニークな恐慌論に一層の彫琢を加え、より精密にしたものともみることができる。その検証の結果は第三篇の「世界大恐慌の原因」で整理されており、それが本書の総括となっているが、こういう構成に本書の意図が示されているといえよう。

もちろん恐慌論は、マルクス経済学に限っても最も未完成の分野であり、定説というべき理論は与えられていない。したがって、佐美氏の理論にたいしても、さまざまの反論がありうるし、多様な評価が与えられるであろう。しかし、一個の理論を整備し、それを現実分析に適用し、それなりに首尾一貫した結論を導き出した成果は十分に評価すべきであって、今後の研究にたいして一定の基礎を与えるものといえることができる。

(二) 第一次世界大戦および世界大恐慌を通じて、いわば一九世紀型の世界経済の編成が崩れ、今日につづく新しい編成が形づくられる過程を明らかにし、世界経済論に一定の視角を与えること。世界経済の編成のされ方に着目し、パクス・ブリタニカからパクス・アメリカナへの推転の過渡期として両大戦間期を位置づける試みは、最近の世界経済論のなかで活発におこなわれているが、本書も

恐慌の形態変化Ⅱ大恐慌の特質をこういう歴史的展望のもとに説明することによって、この推転を具体的に裏付けようとしているとみることができる。

世界大恐慌については、内外を問わず膨大な研究の蓄積があるが、対象が極めて大規模かつ複雑多岐にわたるだけに、さまざまな見解が混在しており、定説といえるものは形成されていない。また、それぞれの国なり地域なりについての分析は多数与えられているが、世界経済的連関の中で世界恐慌としての全貌を明確にしたものは極めてまれである。本書は、右のような欠陥を埋め、整備された理論を基礎として世界経済的連関の中で大恐慌の全貌を描き出すことに一応の成功をおさめているとみることができる。もちろん、瑕瑾を求めればいろいろあげつらうことができるし、難問のすべてが解決されたわけではない。しかし、大恐慌の研究を集大成し、今後の研究の深化・発展のために重要な礎石を据えた功績は大きく、評価に値する。

理学博士松野太郎氏の「中間圏・

成層圏大気力学の解明」に対する

授賞審査要旨

地表から一〇〜五〇kmの高さにある成層圏、またその上層から約九〇kmまでの高さに達する中間圏についての観測は二〇世紀後半から盛んに始められ、幾つかの興味ある現象が発見されている。(一)一九五二年には、成層圏の突然昇温現象、(二)一九六二年には赤道上空を吹く風が約二年周期でその向きを変える現象(QBO)、(三)一九六〇年代には、更に上空にあたる中間圏上部の気温が夏に低く冬に高いという日射と逆の季節変化をする現象などである。松野氏は、これらに関連した基本的な問題にとりくみ、独創的モデルを考え、それを厳密に数式化することによって中間圏・成層圏の運動のメカニズムを明らかにした。

松野氏の業績のうち、最も著名なものは、成層圏の突然昇温現象を理論的に説明したことであり、その後の波動と一般流の相互作用の研究に大きな影響を与えた。成層圏の突然昇温とは、北半球の冬季に、数日で成層圏の温度が四〇度も上昇する現象である。松野氏